

こんにちは。研修部の杉元です。

今回は、「触覚による生活情報入手の工夫」について少しお話しします。

私の現在の見え方は、明るさや、目の前にあるものの影がなんとなく分かる程度で、文字や物の形を認識することはできません。仕事や生活に必要な情報は、主に点字と、音声読み上げプログラムを搭載したパソコンやスマホを使って入手しています。

視覚障がい者イコール点字、というイメージをお持ちの方は多いことと思います。たとえば、街の中、駅、ホテル、ショッピングモールなどで点字表示を見つけたとき、普段から点字を使っている私はたいへん嬉しくなります。そのちょっとした点字表示があるだけで、私の活動の自由度はぐっと上がるからです。自分でもいろいろなものに点字のラベルを貼り付けて、便利に暮らす工夫をしています。

とはいっても、視覚障がい者が行くところ全てに点字を付けることは不可能ですし、場合によっては、表示をする人にも、利用する人にとっても、点字よりメリットが大きいと言える工夫があるのも事実なのです。

驚かれるかもしれません、点字を使いこなせる人は、我が国の重度視覚障がい者の3分の1程度と言われています。大人になってから視力を失った方が点字をすらすらと指で読めるようになるのは、本当に大変なことだからです。

では、点字以外に、見えない・見えにくい人が触覚から情報を得ているものには、どんなものがあるのでしょうか？

街の中で看板が見えたり、建物の中で行きたい部屋の表示が見えたりすれば、目的の場所へたどり着くのは何でもないことですが、それが分からなくなったら、たちまち困ってしまいます。そこで私たちは手や足で確認できる情報を手がかりにしているわけです。「足下の床の材質が変わったところの次の角」とか「非常ベルが付けられてる壁から三つ目のドア」「ブロック塀が切れたところから20歩」などの手がかりを元に行動しています。履き物を脱いで入るような場所では、例えばなるべく端っことか、一番上とか、靴をしまった靴箱を探し当て易いようにしておきます。私は、ホテルに宿泊するとき、用事で部屋を出た後、自力で戻ってこられるように、自分の部屋のドアノブにヘアゴムやキーホルダーを付けておきます。本校の廊下には、ときどき鈴がぶら下がってあって、その正面の部屋が保健室だったり校長室だったりという目印になっていますし、幼児児童生徒の中には、自分の教室や座席に特徴のあるシールを付けて分かるようにしている人もいます。

一般に出回っている商品などにも、触って分かる工夫がしてあるものがあります。皆さんの家で使っているシャンプーのボトルに、細い横線が1センチほどの間隔で縦に並んで浮き出ていますか？これは、シャンプーと他のボトルを区別するための、日本国内で統一されたデザインです。同じように、ボディソープには、縦に一本線が通って浮き出ているボトルが多く採用されています。ヤマト運輸の宅急便の不在票には、猫耳のような形の切り込みがあります。食品などにかぶせるラップの箱には、Wの形のマークが浮き出して付けられており、アルミホイルと区別することができます。

さて、こんな風に、私たちは触覚を様々に活用しながら暮らしているわけですが、一つ忘れてはいけない、大切な視点があります。それは、点字にせよ、その他の目印にせよ、「利用する人が気付

く場所に表示されていること」です。目から入る情報は、例えば看板や標識のように、そこにあるだけで自然に目に飛び込んできます。しかし触覚による情報は、こちらから意識して触ったり、足で踏んでみたりしない限り入ってはきません。

以前利用した、ある施設で、各部屋の名前がきちんとドアに点字で記されていました。それは素晴らしいのですが、残念なことに、その表示は、ドアの、目の高さに付けられていたのです。表示は目の高さというのは、目で情報を得る人の概念です。見えない人は、その高さの場所を自然に手で触ることはないので、誰かから「点字が付いているよ。」と教えてもらわない限り、そこに点字があることに私たちは決して気付きません。それらが、ドアノブや手すりなど、私たちが自然に触れる可能性の高い所にあったなら、この施設の取り組みは「完璧だったなあ。」と思った出来事でした。

以上、思いつくままに書いてきましたが、生活情報の多くを触覚から得ている私たちの世界を少しでも感じていただけたなら幸いです。